

異聞風聞

編集委員

大西 隆雄

沖縄本島から飛行機で30分余り。久米島は、群青の海に囲まれた美しい島である。

「沖縄・球美の里」。原発事故で被災した子供たちの一時保養は各地で行われているが、一年中受け入れる保養所はここが全国初という。7月5日、福島から第1陣の母子50人が到着。

以来、利用者は約230人に。年末年始はもう満杯になった。設立をけん引し、東京と久米島の往復で忙しいフォトジャーナリスト広河隆一さん(69)は月刊写真誌「DAYS JAPAN」(デイズジャパン)編集長に都内で会って聞こうと言った。「被ばくしている子供たちを、このまま放っておけない。いますぐできることを、という思いからです」

保養所は海を見渡せる山の腹にある。陶芸工房だった3階建ての建物を改修し、50人が宿泊できる。改修費に約3千万円がかかったが、2段ベッドや移動用バスは寄付で賄うことができた。空調設備はもちろん食堂、

◆ ◆

保育室、図書館も整備した。生活の基本は「ゆっくり、ゆったり」。外遊びも、読書など室内で過ごす時間も大切。掃除当番、配膳係などを決め、約2週間単位の保養生活。広河さんは長年、チェルノブイリ原発事故で被災した子供たちを支援してきた。その経験が生きた。

「心のリラクセスと新鮮な食べ物が増え免疫力を高める。子供たちを、このまま放っておけない。いますぐできることを、という思いからです」

福島の子供たちに保養所を

ちが心身ともに解放され楽しめるプログラムが大事。チェルノブイリで学んだことです」

福島の事故から1年半ぶりの海。「砂をさわっても大丈夫なんだ」と大はしゃぎの子。自分の今の姿を残そうとマットに等身大の自画像を描いた子。

広河さんはそんな様子を間近で見てきた。「ここに来ると、日に日に子供たちの表情が明るくなる。それを眺めていると、いろんな苦労も吹き飛ばす」

に、来春、設立準備委員会を発足させる。候補地は札幌近辺。企業や個人から募金を募る。呼び掛け人の打診も始めた。

同会の共同代表、矢内幸子さん(48)は今年24日、札幌市内での集会で保養所への期待を話した。「これまで宿泊先を探すのにいつも苦労してきた。沖縄の前例もある。ぜひ北海道にも通年の保養所をつくりたい」。自

身も福島県から札幌に避難してきた。福島の子供が心も体も癒やされる場所を」と願う。

す。将来どうなるか予測できない。国は性根をすえて厳密な健康診断をすべきです」。保養の効用も挙げた。「年間1〜2カ月の保養でも非常に意味があります。何よりもそこで暮らしていることが危ないことだと天下に知らしめることができる」

松崎医師は稚内出身。北大医学部卒で呼吸器内科が専門。筋金入りの反たはこ闘士として知られるが、福島の子供たちの集団疎開裁判で「不可逆的な健康被害を予防するためには、速やかに汚染地域から避難する必要がある」との意見書を提出(5月19日)。英訳され、海外の医師からも注目された。

道などによると、今年、被災地から北海道に一時保養にやってきた親子はざっと5千人。保養をきっかけに絆が生まれた。「生きる力をもらいました」。そんな声も聞いた。保養所は子供たちの未来のためにある。